

一. 尋牛 じんぎゅう

自分で自分を探し始める。
失った牛を探す場面。
本来の自己が内にあることをまだ知らずに、探しに出るところである。



二. 見跡 けんせき

自分の中によい資質が必ずある。
牛の足跡つまり手がかりを見つけるが、足跡を見てもそれは知識として牛の存在を知ったことにはならない。



三. 見牛 けんぎゅう

すべてが真理の力で動いている。
牛の声を聞いて後姿を見る。しかし、まだ牛のすべてを見たわけではない。



(022)

四. 得牛 とくぎゅう

自分を自分のものにする努力。
ついに牛をみつけて手綱をつけるが、嫌がる牛を引きつけようとする状態。



五. 牧牛 ぼくぎゅう

自分で自分を探し始める。
荒れる牛を馴らして連れて帰るところ。
手綱に張りつめた様子はない。ここではじめて、牛の顔が描かれる。



六. 騎牛帰家 きぎゅうきか

悟りとは自分を取り戻すこと。
心の平安が得られれば、牛飼いと牛は一体となり、牛を御する必要もない



七. 忘牛存人^{ぼうぎゆうそんじん}

本来の自分になりきる。
家に戻ってくれば、
牛を捉まえてきたことを忘れ、
牛も忘れる



八. 人牛俱忘^{にんぎゆうくわうぼう}

「私が・・・」の意識を消す。
牛を捉まえようとした理由を
忘れ、捉まえた牛を忘れ、
捉まえたことも忘れる
忘れるということもなくなる
世界



九. 返本環源^{へんぽんかんげん}

あるがままの自然が広がる。
何もない清浄無垢の世界
からは



十. 入廓垂手^{にっつてんすいしゅ}

知らないうちに心が伝わる。
悟りを開いたとしても、
そこに止まっていたは無益
再び世俗の世界に入り、
人々に安らぎを与え、悟りへ
導く必要がある



どんな人にも仏の真源、仏性が備わっているが、迷いの世界に入り込みもがき苦しんでいるので、そこから逃れる方途をこれまでも示されてはきたがそれらは不十分であったので。新たに廓庵禅師は牧牛によってその方途を示された